

初めての小豆島

宇敷 辰男

先月初めて小豆島を訪れた。瀬戸内海で淡路島に次ぐ二番目に大きな島であるが、大田区と世田谷区に杉並区を足した位の面積に高尾山（標高五九九㍎）や陣馬山（八五四㍎）に匹敵する山がそびえているとは思わなかった。

レンタカーで麓の宿を出発すると直ぐに急な坂道に入り耳がツンとしてくる。山は奥深いけれど山道の向こうに海が見え隠れしている。四方指大観峰（しほうざしだい かんぼう）の展望台（七七七㍎）に着き高台に立つとぐるりと見渡せた。さざ波の画きだす紺色と水色の沖合に島々が浮かんでいる。左手の森と紅葉に覆われた奇岩の山が寒霞溪（かんかけい）、その向こうに見えるのが星ヶ城山（八一六㍎）で瀬戸内海の最高峰である。

応神天皇がこの山に登った記述が日本書紀にあり、阿豆枳辞摩ニ小豆島（あずきじま）の名前が登場する。宿の近くに在った推定樹齡千六百年以上の宝生院（ほうせいじん）の真柏も応神天皇お手植えと伝わっていた。

瀬戸内海の至便な海上交通によって約四百年前大和国三輪から素麺の製作技術が伝わり、雨の少ない温暖な気候の小豆島で名産品になった。同じ頃紀州湯浅から金山寺味噌の上澄み調味料である醤油の製法を学び、製塩業が盛んだったことから醬を名産品に育てた。

今から百十四年前オリーブの試験栽培に国内で唯一成功した話は有名である。午後
の陽射しを受け約二千本のオリーブの木が立ち並ぶ急な南斜面が、道の駅小豆島オリーブ公園として整備されていた。根元から伸びた幹が二股三股に分かれて優雅に広がる枝に目をやると、繁って伸びる小枝の先に小さな笹舟のような葉を付けていて、その根本の茎に黒や青いオリーブが豊かに実っていた。オリーブ発祥の記念碑から眺望すると眩しい海原に船の姿が映り、島から島へと穏やかな海が広がっていた。

瀬戸内海に囲まれた豊かな風土のなかに小豆島の伝統が受け継がれている。

新しい文化を創り続けていくこの島にまた来たいと思う気持が湧き上ってきた。